

真空 パーツメーカー としての自負



株式会社マルマエ 代表取締役社長

前田 俊一

まへだ としがず

流れのままに

株式会社マルマエ代表取締役社長・前田俊一は、熊本県に近い鹿児島^{やまあい}の山間の町で生まれた。まさに山の中を駆け回るわんぱくな前田少年は、中学時代にはマイコンに興味を持ち、下校途中にある電気店に立ち寄って、デモ機で延々とプログラムを組むような一面もあった。

やがて、高校受験を迎えると、遊び仲間

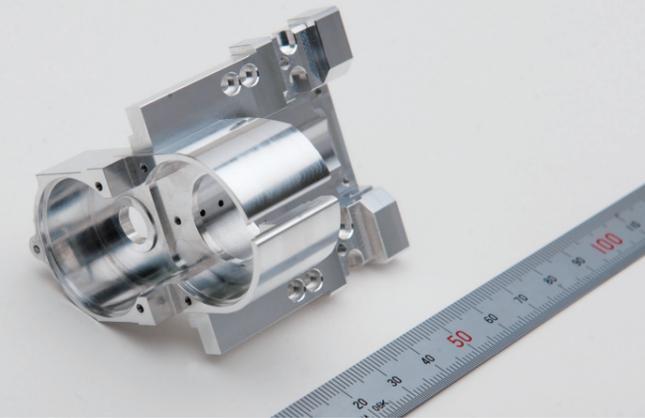
が県内の公立工業や商業に進学することから、自分もそれに倣うつもりでいたが、担任教師の強い勧めで普通科の進学校に願書を出すことに。本人は、「一夜漬けの試験勉強だった」と言うが、見事合格した。

入学すると、副担任が顧問を務める体操部に入部。体力測定で、垂直跳びや反復横跳び、握力など器械体操に必要な能力を前田が備えていることを知った、これも副担任の誘いがあったからだ。

このように、進路も部活の選択も前田には主体性がない。唯一、マイコンを備えているからということで入部した物理部に自らの興味を感じられるくらいで、その物理部と隣接した地学部にも級友が入ると付き合いで加わっている。

「なんだか流れのままっていう感じですよ」と当時を振り返る前田だった。

次ページへつづく



モノづくりは現場に出なければ

見つからない未来

体操部で床運動や鞍馬のトレーニングを行う一方で、マイコンでスクロールゲームのプログラムを組む毎日。通っているのは県下有数の進学校である。しかし、強い情熱を傾けるものがない。今の高校で一生懸命勉強し、大学に進学するなどということが将来の展望だとも思えなかった。

そんな前田が唯一心を許せるのが、進路は違えたが今も連んでいる中学時代からの仲間たちだった。前田は彼らと一緒にいる時、東の間開放的な気分になれた。

2年生になった前田は、仲間たちと無免許でオートバイを走らせ、無期停学の処分を受けた。

両親は家業の鉄工所、株式会社マルマエ工業でともに働いている。親の監督下に置けないと見た学校は、前田を登校させ、授業を受けさせずに別室で自習させた。

父の務さん、母の良子さん、両親ともに前田を厳しく育てた。時に鉄拳制裁も厭わぬ躰を行ったが、前田にはそれも柳に風だった。

進学校であったことから、「次になにかあれば退学だぞ」との通告を受けてはいた。

ところが、停学が明けて2か月が経ったある日、また問題を起こし退学になった。

厳しいはずの両親の反応は、ため息ひとつ吐いたきりであった。せっかくなった高校なのにもったいないだろうと、がっかりしていた。

進学校に入れる学力があり、体操部の

顧問教師が認める身体能力を備え、マイコンのプログラミングを行う好奇心と集中力を持ちながら、未来を見つけることのできない前田は、どこまでも利他的だった。

静かな情熱

半年ほど喫茶店のアルバイトをして過ごした。そんな前田に、「もっと本気になって働いたらどうだ」と親戚のおじさんやおばさんが意見してくれた。

前田は渋々といった感じで両親の営むマルマエ工業に入社した。タンクや配管など複雑な溶接を行う製缶加工を得意とする家業の現場で、前田はあらゆる溶接技術の習得に取り組んだ。元来モノづくりは好きである。みるみる腕を上げていった。

夜学にも通うようになり、ようやく軌道修正ができた前田のささやかな楽しみは、今度は免許を取得しての、仲間たちとオートバイを走らせることだった。

工場で体得した溶接技術は、バイクのメンテナンスにも役立った。部品をバラし、細部の調整を行う。前田は自分の中に初めて静かな情熱が生まれるのを感じていた。

レースとの出会い

ミニバイクレースのことを聞いたのは、バイク屋からだった。50ccのミニバイクで、1周500～600メートルのカートコースを走る。高速を競うスプリントと距離を争う耐久レースの2種目があり、前田は2種目とも

にエントリーした。

前田は燃えた。出勤前の早朝、埠頭に向いてタイヤでコースをつくってトレーニングに励んだ。

レースは毎週のようにあり、前田は県内の大会で連戦連勝。破竹の勢いだった。

そうした中、20人ほどいたバイク仲間の1人が山道を走っていて事故で亡くなった。心を痛めた前田は、仲間を引き連れ、本格的なサーキットでのレースに挑むことにした。「峠を走るより、サーキットのほうが安全だと思ったんです」。

中古のレース用バイクを購入した前田が、サーキットを試走するのを見たそのバイク店のオーナーはおどろいた。前田は初めて走ったサーキットで、コースレコード(コースでの過去最速)に近いタイムを出したのだ。バイク店のオーナーは、自分のレースチームに、前田をスカウトした。

目的は鈴鹿4時間耐久という大舞台に出場する為だった。

予選通過は、15分ずつをベアライダーと走り、どちらかのよい記録で決定する。ところが、先に走ったベアライダーが1周目で転倒。次に前田が乗るはずだったバイクも破損し、予選通過はかなわなかった。

しかし、その後は出場したレースで毎年ポイントを積み上げ、4年で国際A級ライセンスにまで昇格した。

レースに参加するのにも、バイクのカスタマイズにも莫大な費用がかかる。前田は資金集めのために、バイク部品の注文製造会社T's M'sR&Dを立ち上げる。夜学を

卒業していた前田は、昼間はマルマエ工業で働き、夜間をこの事業に当てるという二足のわらじを履いた。「——と言うか、お袋が渋くて、7万円しか給料を貰っていないんで、苦肉の策だったんですよ」と笑う。

V字回復

マフラーや足載せ用のバックステップなど、自身がレーサーである前田がつくるバイク部品は評判を呼び、注文は引きも切らなかった。

一方で自らがつくったバイクをアメリカに送り、レースに挑むなど、華々しい活躍を続ける。

前田が29歳になった年のクリスマスのレースで、仲間が事故を起こした。入院先で前田は付き切りだったが、とうとう助からなかった。葬儀が済んで、久しぶりに家に戻ると、前田の身を案じた良子さんがすっかり疲弊していた。マルマエ工業が何度目かの経営危機に瀕しており、その心労もたっていた。

前田はレースから退くことを決意する。苦しい台所事情の家業に対して、自身の

T's M'sR&Dは好調だった。こなし切れないほどの注文があり、切削部門を任せていた外注先が、複雑な加工に対応できないと音を立ててきた。

前田はマシニングセンタを導入し、自ら加工することを考えた。だが、1人きりの会社規模ではリース契約ができない。マルマエ工業のR&D事業部として経営を一本化、本格展開を開始することにした。リサーチ＝研究の「R」と、ディベロップメント＝開発の「D」である。

事業部員として社員1人を採用。翌年は2人、さらに次の年には4人と、倍々に人が増えるのに比例して、売り上げも2倍2倍で増加していった。扱う製品も、バイク部品から発電所のタービンブレードなど産業部品に。さらには半導体製造装置の精密部品がメインになった。

平成13年、株式会社マルマエに社名変更。その頃には製缶など鉄工所の受注はほぼ無くなりR&D事業部が本業となっていた。平成15年には前田が社長に就任した。「当初は、働く側と経営する側の価値観の違いにカルチャーショックを受けました。休みのこととかね。私は休むなんて考えたことがなかったので」。

18年12月に、中小企業ながら東証マザーズに上場を果たす*。しかし30億の設備投資を行ったばかりの21年、リーマンショックを受け経営危機に陥ってしまった。そうすると、今まで家族だと思っていた従業員からも厳しく突き上げられる。そうした怒涛の渦の中に飛び込んで、前田は現場の立て直しを行った。「モノづくりですから現場に出ないと、と思ったんです。それまでは株主さんへのIR(情報発信)などに追われて、現場を離れていた、というより投げ出していた。人を入れても教育していなかったんです」。

その後の技術の伸びは、売り上げと利益の伸びが証明している。昨年8月期には過去最高の利益を記録し、まさにV字回復を見せた。

半導体製造装置の心臓部は真空パーツと呼ばれ、その製造には高度な技術を要する。「真空パーツメーカーとしての自負を持って、これからも成長していきたいですね」。

*証券コード6264

(取材・文＝上野 歩)



Company Profile

EMIDAS会員番号：5684

◆会社名 株式会社マルマエ
◆所在地 〒899-0401 鹿児島県出水市高尾野町
大久保3816-41 高尾野工業団地内
◆TEL/FAX TEL：0996-64-2862
FAX：0996-64-2863
◆設立 昭和63年10月
◆従業員数 90名

◆主要三品目
・液晶製造装置部品
・半導体装置部品
・太陽電池製造装置部品
◆お問合せ 担当：菊地 徳彦